

乗雲

寺報
第92号

H27.9.1 発行

編集人

〒959-2646 新潟県
胎内市西栄町 2-8
TEL0254-43-2419
FAX0254-43-4560
広厳寺
住職 神田英俊

メール
otera@kogonji.jp

その名を呼べばこたえてし
笑顔の声はありありと
今なお耳にあるものを
おもいは胸にせき上げて
とどむるすべをいかにせん
溢るるものは涙のみ

追弔御和讃

曹洞宗の梅花流詠讃歌、一般には御詠歌と呼んでいます。その中の供養編にある歌詞です。仏教の説く苦しみの一つに「愛別離苦」があります。親しい人との別れはとても辛く悲しいものです。生きているお互いそれぞれが両親、兄弟、同胞、縁者等、一度は別れを経験しています。

七月二十五日、長谷寺住職の安澤浩祥方丈様が死去いたしました。長谷寺に就職して三十年余り、満五十七歳でした。二年ほど前からガンが見つかり、その時点で、前立腺から肺に転移していま



した。あらゆる治療を試みましたが功を奏せず、午前十時四十八分お寺の一室にて家族の見守る中、静かに息を引き取りました。私よりも六つほど年齢は下になります。長く親しくお付き合いをさせていただきました。

浩祥師は胎内市（旧中条町）弥彦岡の農家の生まれ（旧姓伊藤浩）、芝浦工業大学卒業後、ご縁があり黒川の長谷寺様の養子となり、先代十九世安澤泰全師のもと僧侶としての道に入られました。

福井県大本山永平寺、新潟市沢海の大栄寺専門僧堂で修行、昭和五十八年に長谷寺二十世を継承し住職となりました。曹洞宗に於いては布教師として檀信徒に教えを説き、また宗務所の庶務主事、教化主事の役職をこなし、地域にあつては民生児童委員をはじめ多くの要職を引き受け、青少年の育成や地域社会の発展に貢献され、その功績は多大なるものでした。

人の別れというのは悲しくせつないものです。詩人の佐藤春夫さんは「春の別れは 藤つつじ 人の別れは ただ涙」と詠いました。藤が咲き、つつじが咲けば春は終わりです。春との別れです。人と人の別れはただ涙のみでありませぬ。どんなに良い人でも、どんな立派な人でも、どんな愛しい人でも、この世に縁が無くなればさようならをしなければならぬのが人生の鉄則です。

「身を削り、人に尽くさんすりこぎの、その味知れる人ぞ尊し」永平寺の大庫院という雲水のお食事を作るところに大きなすりこぎがあります。道元禅師様のお言

葉です。お釈迦様が示した慈悲の心に通ずる道元禅師様のその教えは、いかに自分以外の人間の幸福を優先させて考えてあげられるかどうかということに尽きます。浩祥方丈様は、自分のことよりも、他人が幸福になるため、他の人が喜ぶことならば、この身をいとわず、良きことのためだけに、いつも笑顔で行動してまいりました。まさに、ご自分の身を削りながら、人のために頑張りとおしてきました。私ども宗教者の模範となる生き方でした。

大本山永平寺の道元禅師様をお祀りしてある御真廟を承陽殿と言いますが、その中に孤雲閣という建物があります。「追慕」という額が掛かっています。道元禅師様は七十五十年前にお亡くなりですが、私たちの心の中には立派に生きており、日々報恩のお勤めをしてお慕い申しています。亡くなった人を追慕する懐かしく思うこれが大切なことです。懐かしく思うときにすでにその心の中にその人が生きています。一生ご恩は忘れませぬ。有難うございました。